

---

# 嫌がらせ屋

ほうき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嫌がらせ屋

### 【Nコード】

N5174P

### 【作者名】

ほつき

### 【あらすじ】

石川洋行が友達から教えられた、嫌がらせ屋。本当にあるかも、半信半疑、どうしても復讐したい洋行は、嫌がらせ屋を尋ねてみる。

## はじまり

出勤するのが怠かった。

理由は、昨日大きな失敗をしたからだ。「石川ちよつとこい」案の定、朝から上司からの呼び出し……。

こいつは、いつまでしてる気だ？30分は喋ってやがる。

春の人事異動でこいつが本社からやってきた。前評判はよかった、仕事が出来るキレものだ。

俺もそう思ってた。確かに仕事は出来る。しかし、性格的に問題がある。傲慢、ワガママ、頑固、気分屋。その上、上司には異常なまでペコペコし恐ろしい程外面を気にする。

要するに俺はこいつが、大っ嫌いだ。

こいつのせいで胃を壊した事もある。

世の中にこいつと俺の2人しかいなくても、絶対に仲良くなれない自信がある。

たぶん、こいつも俺の事が嫌いだろう。目の敵されている。

回りの同僚からもそう見えるらしい。

まだ説教は、終わらない。

説教しながら、熱くなるタイプらしい。

元々、気は長い方ではない。我慢限界がある……。

もうダメだ……。

ブチ。何かが切れた気がした。

襟首をつかんで殴ろうとしたらしい。記憶がないのだ。寸前で同僚に止められたらしい。喧嘩が圧倒的に弱い俺がその行動にでたのだから、よほどの事だ。

覚えているのは、「お前はクビだ！ここから、消えろ！」の怒鳴り声。今思つと、おとなげないが、不良の学生のように会社を出てきたやってしまった。

何故我慢できなかったのか？

謝りにいこうか？

無理だ、あいつの声を聞いたら、次こそ我慢できない。あのクソ野郎。このまま引き下がるのは、しゃくだ、いままでの溜まりに溜まった、この怒りをぶつきたい。復讐してやる。闇討ちしてやろうか？凶器を持てば俺だって何とか……。。

ダメだ。無職の上に前科持ちになる。

無職？

そうだ、無職だ。

明日からどうしよう？

仕事も、探さなくては。

やはりここは、大人に成って土下座でもして許してもらおうか？

ダメだ！それくらいで許してくれる様な奴なら、そこまで嫌いにならないかっただろう……。

また、腹立ってきた。

そんな事を考えながら、あてもなく街をブラブラ歩いていたら、夜になっていた。

とりあえず、酒に走る事でやな事を全て忘れたかった。

行き着けのBARで強い酒を飲む事にした。

マスターは、中学生の時から悪友、伸二。

今日の話を全てぶちまけた。平日のせいか客はいなかった。店を閉めて2人でとことん飲む事にした。

午前4時。まだ店のカウンターで飲んでいる。2人とも、かなり酔っていた、伸二は突然、「ところで復讐はするのか？」と聞いてきた。

忘れていたのに、やな事を思い出させやがって……。

また腹立ってきた。

……やってやる……。

酒のせいかな。テンションは、最高長だ。今いけば殺すかもしれないでも、自分が抑えきれない。決心がついた。行こう！奴を殴り倒しに、イスから起ち上がろうとした時に、伸二が話し始めた。

嫌がらせ屋の事を。

金を払えば代わりに嫌がらせをしでくれるらしい。しかも、金額に応じたより悪質なタチが悪い、嫌がらせを…。

嘘くさい。

人を煽っておいて。

くだらん。

まずこいつを殴ろうか？

落ち着け。こいつを殴ってどうする？

イスに深く腰掛けタバコに火を付けたときだった。マスターは、嫌がらせ屋の広告入りのポケットティッシュを出してきた。

…マジか？

都市伝説的な物だと思ってた。

住所、電話番号、御丁寧にメールアドレスまで入ってる。

？？　？　？嫌がらせ引き受けます

## 予約

ピピピピッ。

携帯電話が鳴った。10時35分。頭が痛い二日酔いだ。着信は会社からだ、思わず出てしまった。無視すればよかった。

上司からだ。「退職するなら、私物をもって帰れ。」開口一番にその言葉。

頭にきた。お前にくれてやる。そう伝えて、電話をきった。

タバコに火を付けた。

また怒りがふつふつと、こみあげてきた。

復讐してやる。

伸二から、もらった。ポケットティッシュに目が行く、住所はワリと近い。

話だけでも聞きに行ってみるか？そもそも、こんな怪しい物が存在するのか？嘘くさい。

それよりも仕事探したほうが今後の生活のために…。

いや！ダメだ！こんな気分では、次の仕事に身が入らない。あのクソ野郎が苦しむ姿が見たい…。

このまま引き下されるか！

若干、半信半疑では、あるが携帯を手に取りポケットティッシュに載っている電話番号に電話してみた…。プルプルプル、プルプルプル。繋がった。ガチャ。「おはようございます。嫌がらせ屋です。軽い感じの女の声だ。「新規のお客様ですかあ？」サラ金の電話受付みたいだ。

……。「それでは、13時に予約受け付けました。ご来店お待ちしています。」

予約してしまった。今から出発すれば十分に間に合う。家を出てバス停に向かった。20分くらい進んだ所で降りた。腹が減ってきた、まだ時間がある。嫌がらせ屋の近くでラーメン屋による。そこでラ

「メン屋のオヤジに聞嫌がらせ屋の事を聞いてみる。「聞いた事がない。」予想通りの解答だった。若干不安になってきた、受付の女の喋り方は頭が足りなそうだったし、場所はアパートだし、何よりこんなに近くのラーメン屋が知らないって。

半分諦めながら、指定されたアパートの部屋の前に到着した。

ドアには、従業員募集中のビラが貼っている。

「やる気のある方募集中、経験者歓迎、未経験者も一から丁寧に指導します。」

…。経験者なんているのかよ。

ノックを試してみた。「はい、入ってきてください。」

ゆっくりドアを開けると、若いキャバ嬢みたいな女が立っていた。

「予約された方ですかあ？」受付の時の女みたいだ、喋り方通り、見た目も軽そうな女だ。

「社長、予約された石川様が来店されましたあ。」奥の部屋に向かって呼びかけている。

「どぞぞ。」

奥に通された。部屋の真ん中には応接テーブル。奥には、デスクがあり、パソコンに向かっている。男が一人、色黒、マツチョ、ハデなスーツ。テレビで見る、ヤクザか見方を変えればAV男優にも見える。

「いらつしゃいませ。社長の佐々木です。」凄い営業スマイルだ。白い歯が眩しい。

「早速ですが、依頼内容をうかがいたいのですが？」

俺は、ここに来るまでの経緯を説明した……。話を始めると涙目になっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5174p/>

---

嫌がらせ屋

2010年12月25日21時18分発行